

線路の上に落ちたリボン

hichakko

青いリボンが、ふわりと宙に舞い上がる。

まるでそれは蝶のように華やかに、しばらく宙空を漂い続けた後、最後に砂利が敷き詰められた線路の上に、ぽとりと落ちた。

呆然とその光景を見守っていた私は、静かに自分が着ている制服を見下ろす。

リボンが、ない。

.....ということは、よりもよって線路のど真ん中に落ちているあの見覚えのある青いリボンはまぎれもなくさっきまで私の制服の一部だったもので。

駅のホームで電車を待っている間、呑気に胸元のリボンを結び直していたのがいけなかった。

運悪く突風に襲われ、見事にリボンだけ飛ばされてしまったらしい。

しかし、問題はどうやってあれを回収するかだ。

向かい側のホームにある改札口を見れば、混雑する窓口の対応に追われていて、駅員さんはこちらの様子に気付く気配はこれっぽっちもない。

左手首にはめた腕時計に視線を落とせば、電車が来るまであともう2分。私が駅員さんに言いに行っている間に、電車の方が先に来てしまうだろう。

次の電車に乗っても十分登校時間には間に合うが、乗れる電車に乗らずに見送るのはなんか癪だ。

次の電車がもっと混雑することを考えれば尚更の話。

かくなる上は自分で回収するか。

ホームから線路を見下ろすと、結構な高さがあることに驚いた。

飛び下りるのは簡単だが、問題はどうやってこの高さをよじ登るかだ。

自慢じゃないけど、身長150cm未満のこの私がどうやって。

うん、無理。

しかもよじ登ってる最中に電車来ようものなら一貫の終わりだし。

制服のリボンごときで自分の命を散らすのは正直割に合わない。

仕方ない、後で駅員さんに言って回収してもらおう、と儚い溜め息をもらした時だった。

私の横を黒い突風が吹き抜けた。

学ランに身を包んだ背の高い男の子が、突然線路に飛び下りたかと思ったら、さっと私の青いリボンを回収し、ホームの縁に手をかけるとそのまま腕の力だけでひょいと自分の体を持ち上げて、そして何事もなかったようにホームの上へと飛び上がる。

ええええええ！？

私が悩んでる間にこの人いとも簡単に解決しちゃったよ！？

「はい」

青いリボンを差し出され、私は茫然と受け取る。

「ありがとう...ごさいます」

「どういたしまして」
ゆっくりと視線を上げると、頭一つ分見上げた先には、とびきりの笑顔。
その瞬間、私の中で鐘が鳴った。

——恋の訪れを告げる鐘の音が。